

乙 貞

第148号 通巻26 第3号

2006年9月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

Tel・Fax 077-585-4397

〒 524-0212

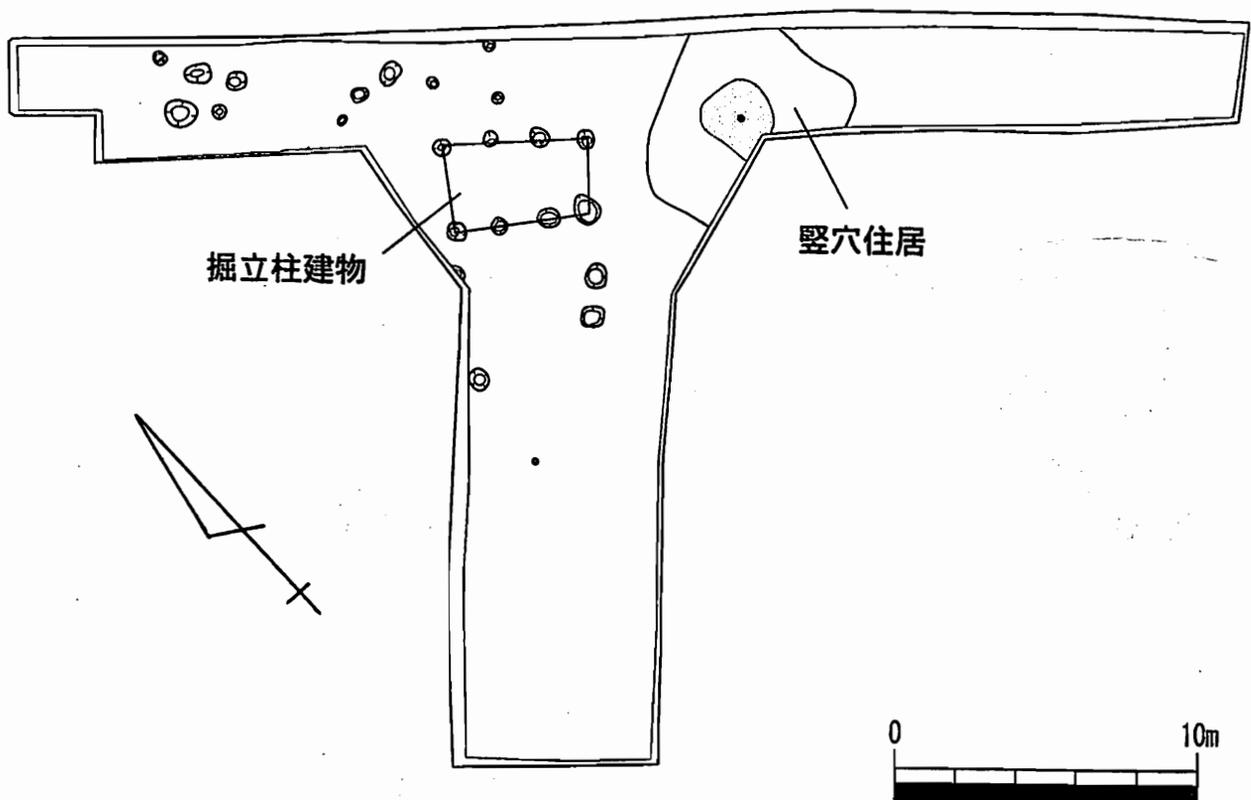
守山市服部町2250番地

発掘調査だより

1. 長塚遺跡 10次調査

河西小学校の東側に位置する場所を6月から7月初旬にかけて調査しました。遺跡は横を流れる法竜川の洪水の影響を受けたのか、砂を多く含む粘土が厚く堆積しており、その堆積土の下で^{たてあなじゅうきよ}竪穴住居や^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物などが見つかりました。竪穴住居は一辺約3mの方形の住居で、残存状況はよくありませんでしたが、床面中央に炭の堆積が確認されました。掘立柱建物は1間×3間の規模で、柱間距離は1.5~2.7mとややばらつきがあります。柱穴は約40cmの深さで、8つのうち6つに柱根が残っていました。いずれの建物も出土した遺物から古墳時代前期頃の年代が考えられます。

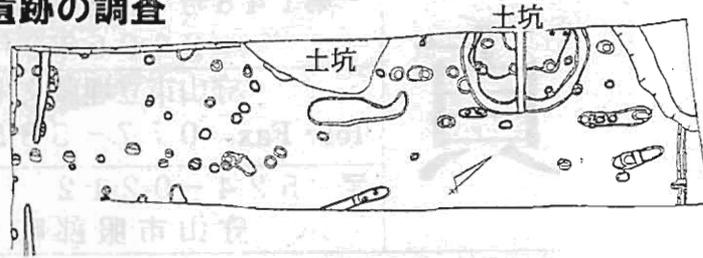
(大岡)



▲長塚遺跡 10次調査遺構全体図

2. 二ノ畦・横枕遺跡の調査

守山六丁目字水口無の水田地において、共同住宅及び分譲住宅建築に伴い、7月中旬より8月下旬まで発掘調査

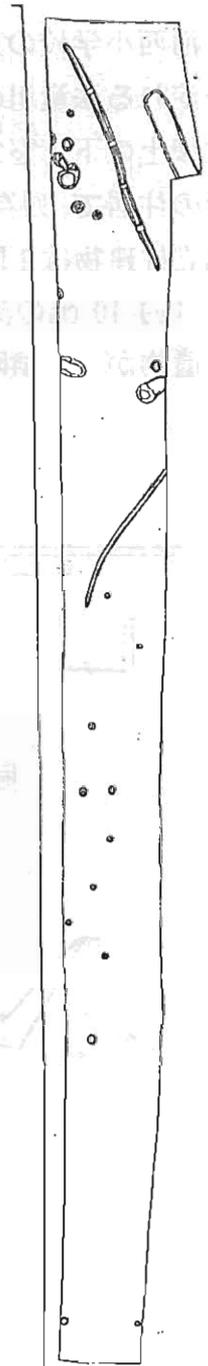


▲二ノ畦・横枕遺跡遺構全体図

を実施しました。調査地は弥生時代中期末の環濠集落である二ノ畦・横枕遺跡の中央部にあたり、調査地のすぐ横には石田川が流れています。調査の結果、全体に砂礫土が厚く堆積しており、それが地山となっていることがわかりました。石田川に沿ったA区では、平安時代とみられる溝や柱穴等が検出されましたが、弥生時代の遺構は希薄でした。溝内から土師器皿が数点出土しました。

B区

A区



0 10m

B区では円形と方形の落ち込みが検出されました。当初は竪穴住居と思われましたが、掘削の結果、住居ではなく土坑（大きな穴）であることが判明しました。この他、柱穴が検出されましたが、古墳時代後期のもので、明確な建物は想定されませんでした。一部、柵列状に並ぶ柱穴があり、古墳時代後期の遺構が調査区外に広がっていることが考えられました。

今回の調査地点からは、当初予想された弥生時代中期の遺構は希薄でした。弥生時代の人々も固い礫層を避けて集落を営んでいたのでしょうか。

(伴野)



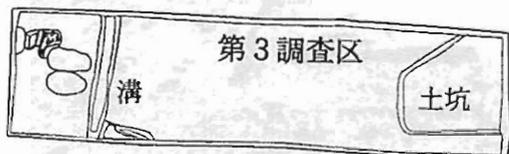
▲二ノ畦・横枕遺跡B区全景写真

3. 播磨田城遺跡 2次調査

遺跡の調査報告書・資料 4

6月中旬より宅地造成工事に先立って実施していた調査は、7月末で終了しました。道路予定地部分約400㎡を対象にした調査からは、溝、井戸、土坑などの遺構を検出しました。これらは主に第1調査区に集中していました。

第1調査区の南壁に沿って見つかった井戸は、直径約1.3mを測り、検出面から約1m下に井戸枠とみられる2段の曲物まげものが据えられていました。曲物の中からは鎌倉時代頃のが瓦器きわん碗や土師器、陶器などが出土しました。



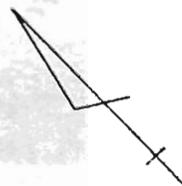
第2調査区は、現地表面から65cm～75cm下で一部地山じやま（人の手が加わっていない自然の地盤で、遺構を検出する際の地盤とすることが多い。）が検出されましたが、大部分はさらに深くまで削平されていました。ここでは、溝1条と石列が見つかりました。石列は北西方向一直線に、現状で14個の花崗岩かこうがんが2段に積み重ねられていましたが、その性格はよくわかっていません。

第3調査区では溝1条と土坑3基を検出しました。遺物はほとんど出土しておらず、その年代はよくわかっていません。

今回の調査地は字古城ふるじろで、播磨田城遺跡の中心地でもあったことから、城に関わる遺構の検出が期待されましたが、城に係る成果は得られませんでした。（畑本）



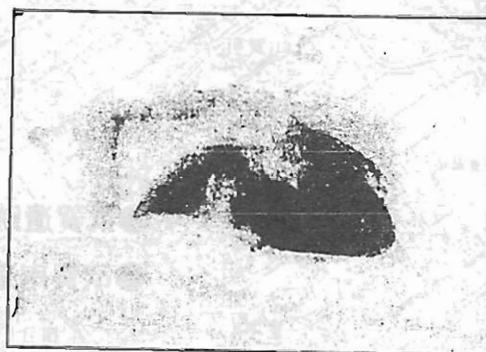
第2調査区



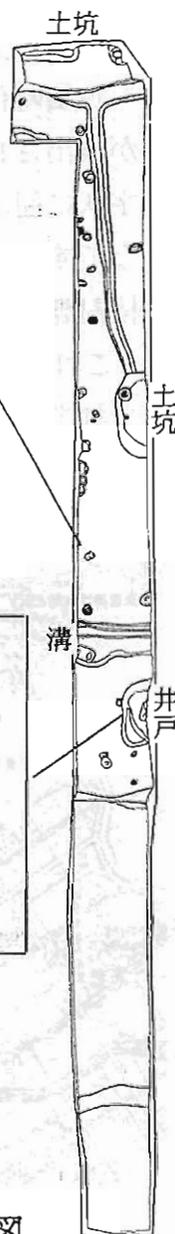
第1調査区



▲溝と柱穴



▲井戸

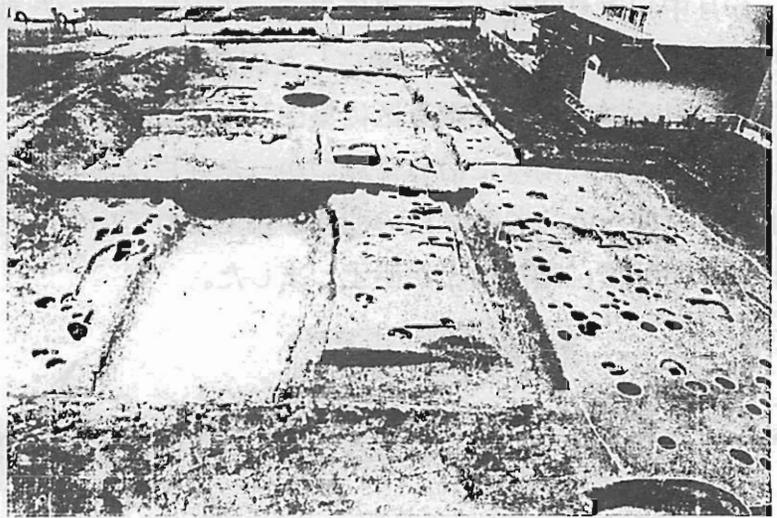


▲播磨田城遺跡 2次調査遺構全体図

4. 欲賀・欲賀南遺跡の調査

区画整理事業に伴い実施してきた^{ほしか}欲賀遺跡の調査は7月末に終了し、現在は南に隣接する欲賀南遺跡を調査中です。

欲賀遺跡の調査では、弥生時代中期の土坑や溝が見つかりました。これまで、弥生時代中期頃とみられる^{ませいせきぞく}磨製石鏃（表面を^{けんま}研磨し、滑らかに加工した石鏃）が数点発掘されていましたが、遺構が見つかったことで、この



▲室町時代の屋敷跡（欲賀遺跡）

地点にも弥生時代中期の集落が営まれていたことが確認されました。この他、弥生時代後期～古墳時代にかけての溝や室町時代の屋敷を区画する溝、井戸、そして多数の柱穴群などが検出され、多量の遺物が出土しました。室町時代の屋敷跡は、中央を幅5mの大溝でコ字状に囲み、その外側に幅70cm程の溝を巡らし、さらにその外側を大溝で囲んでいたようです。ただ、いずれの溝にもやや時間差があるとみられ、屋敷の構造については今後の検討課題です。いずれにしても屋敷の規模は一辺50mを超えるものであったと推定され、これまでに欲賀遺跡や欲賀城遺跡で確認されている中世の屋敷群のひとつであると考えられます。

(小島)



▲調査位置図